

「居場所」と「居心地」の差異に関する検討

Examination of the Difference between “IBASHO” and “IGOKOCHI”

計 良 真 生*・大 森 泉 綺**・大 木 桃 代***
Masaki KERA, Mizuki OMORI, Momoyo OHKI

要旨：大学生を対象に、定性的・定量的分析の両面から客観的に把握した「居心地」の概念の構造の明確化と、「居場所」と「居心地」の構成概念の差異の比較検討を目的とした。

「居心地」は「本来感」「自己受容感」及び「安心感」という3つの概念から構成され、その他に自己完結型の側面も抽出された。

「居心地」は、他者の存在を必須とはしないが、他者の存在を意識したり、他者からの被受容感を得て安心感を得られる場所や空間と定義された。一方、「居場所」は、ありのままの自己を安心して表出し、自身の役割や被受容感を感じる場所や空間と定義された。「ありのままの自己」をより具体化した内容も抽出された。

「居心地」と「居場所」の構成概念に大きな差は認められなかった。ただし両概念において「被受容感」「安心感」「場所性」は共通しているが、「居心地」は他者の存在を必須条件としておらず、「居場所」を感じる大前提としての包括的な概念であることが示された。

キーワード：居場所, 居心地, 相互作用

問題と目的

1980年代における不登校問題の増加以降、人間科学分野において「居場所」という概念が注目されてきた。「居場所」の概念は非常に多義的であり、それぞれの人がそれぞれに意味を見出しうる。それは数多の研究者によって再三論じられてきたことである。

また一方で、「居場所」に類似する言葉として「居心地」がある。「居心地の良さ・悪さ」は対人関係における「空気感」「雰囲気」や「居やすさ」「気まずさ」などと表現できる。また、「湿度」「温度」や「風通し」「見晴らし」「天気」などの空間的な解釈にも用いられることから、「居心地」の概念も「居場所」と同様に多義的であると考えられる。しかし、「居場所」と比べて、その概

* けら まさき 文教大学大学院人間科学研究科人間科学専攻修士課程

** おおもり みずき 文教大学大学院人間科学研究科人間科学専攻修士課程

*** おおき ももよ 文教大学人間科学部

念と定義、構成要素を明らかにするべく行われた研究はきわめて少ない。

「居心地」は「良し悪し」で言い表されるが、「居場所」は「有無」で表現されるように、「居場所」と「居心地」は別の概念で捉えることが可能だと考えられる。したがって、それらの構成要素も異なっていると推察できる。近年の研究では、学校や働く場、まちづくり等において「居心地」が注目されている（菅野・木村，2019 石川，2021 西川，2020）ように、「居心地の良し悪し」を測定することは、人間が住みやすい空間を作る上で重要なアプローチだと言える。またそれは、「居場所づくり」とは異なる側面から検討されるものであると考えられる。

居場所論

居場所という概念は臨床心理学・教育心理学・教育社会学・教育哲学などの分野を中心として扱われ、多くの研究が展開されている。しかし、従来の研究において、居場所の概念や定義は統合されておらず、各研究者によって異なる。

「居場所」という言葉が用いられるきっかけは、1992年の文部省（現文部科学省）による、学校不適応対策調査研究協力者会議報告『登校拒否（不登校）問題について一児童生徒の「居場所」づくりを目指して一』である。そこでは、「心の居場所」を「自己の存在感を実感し精神的に安心していただける場所」とし、学校がその役割を果たすことを求めている。また、2003年の不登校問題に関する調査研究協力者会議による『今後の不登校への対応のあり方について（報告）』では、「自己が大事にされていると認められている等の存在感が実感でき、かつ精神的な充実感の得られる」場所として、「心の居場所」について言及されている（文部科学省国立教育政策研究所，2012）。この頃から、「居場所」の研究が急速に増えていった（西川，2021）と言える。

先行研究における居場所の定義を大きく分類すれば、「ありのままの自分でいられる場所」「自己肯定感を高める機能がある場所」「他者との相互作用がある場所」などの側面が挙げられる。

居場所が「ありのままの自分でいられる場所」として語られているものとして、久田（2000）は居場所を「ありのままの自分を丸ごと受け入れてくれる人間関係や空間という意味を持つ」としている。また「ありのままの自分を他者が受け入れ、承認してくれるという自己受容や自己承認を感じることができるよう、それゆえここにいると安心とか安らぎとか寛ぎを感じることができる」（住田，2008）や、「そこに自分がいてもいい場、自分らしくいられる場、自分がありのままにそこに居てもいいと認知し得る感覚」（中原，2002）という定義もある。

「自己肯定感を高める機能がある」ことを含む研究では、杉本・庄司（2006）は居場所の心理的機能の構造を分析して、その発達的变化を明らかにし、居場所の心理的機能には「被受容感」「精神的安定」「行動の自由」「思考・内省」「自己肯定感」「他者からの自由」の6つの因子があるとしている。また廣木（2005）は、居場所を「ありのままの自分が受け入れられる場だけでなく、自分の役割が実感できるために自己肯定感が取り戻せる場所」と定義している。

「他者との相互作用」の観点から捉えられたものでは、萩原（2001）による研究がある。萩原は、居場所は「自分と他者との相互承認という関わりにおいて生まれる」ものとし、『「自分」「私」という観点から、『居場所』とは『私』とひと・もの・こととの相互規定的な意味と価値と方向の生成によってもたらされる『私』という位置である』というように、「居場所」は社会的位置づけによって捉えられているとしている。また吉村（2000）は「自分の居場所を見つけることはお互いの関係を作っていくことである。仲間と向き合い、想いを伝えあい、受け止めるなかで、自分の「居場所」を確認しあう。」と論じている。

一方、居場所は物理的なものだけでなく心理的側面を持つものとしても捉えられている。則定(2008)は居場所を心理的なものとして捉え、青年期を対象とした心理的居場所を「心の拠り所となる関係性、および安心感があり、ありのままの自分を受容される感情」であり、物理的側面だけでなく人間関係性に基づく心理的空間も含むことがあるとしている。また中島・廣出・小長井(2007)は、「居場所」という言葉は、2000年以前発行の辞書では物理的な側面を指す「いどころ・座る場所」とあるが、2000年以降発行の辞書には「身を落ち着ける場所」などの心理的側面が加えられていることを指摘している。

このように居場所研究は、「ありのままの自己」「自己肯定感」「他者との相互作用」のように様々な視点があること、また最近の研究では物理的な場所だけでなく、心理的側面も強く注目されるようになってきている。

居心地論

「居心地」という言葉も「居場所」のようによく使われる言葉ではあるが、居心地の概念そのものに関する研究はあまりなされていない。居心地という概念が用いられる研究においても、ほとんど定義付けされていないのが現状である。

菅野・木村(2019)の研究では、居心地を「任意活動を促す場所」として定義し、滞留者(そこに留まっている人)は、居心地の良し悪しを「他者」、「空間の広さ」、「眺める対象」の3つの要素から自分がいる場所の雰囲気を感じて判断していると述べている。岡本・岡田(2020)は、夜型子育てサロンでは「支援者や仲間から自分を受け入れられたと感じると、居心地が良くなり、そこが居場所になる」と論じている。

西川(2019)は、居心地の良い場を『自己組織化を促す「場」』として捉えている。西川は居心地とは「身を置く空間(場所・環境)において抱かれる(受ける)平安な(安らいだ、幸福な、気持ちのいい)心地(心持ち、気分)、また、ものごと(特に人間関係)に対する心の置き場」と定義した。さらに、居心地に近い概念として「心理的安全性」があると述べ、それは「チームのメンバーそれぞれが自分の考えや感情を安心して気兼ねなく言える雰囲気」と表現している。また、働く場の居心地に強く影響を及ぼす要因について、「行動の自由(飲食やトイレ・雑談・休息のタイミング)がある」「その場にいると安心する」「風通しの良い雰囲気がある」「良い方向に循環している」の4項目が大きく寄与していることを明らかにしている(西川, 2020)。

現状では多くの研究が心理的居場所感と居心地の差異があいまいで、居心地が良いと居場所ができる、または2つの言葉をほぼ同じような感覚で捉えているものが多い(西川, 2021)。

「居場所」と「居心地」研究の比較

以上、「居場所」と「居心地」それぞれの先行研究における、居場所と居心地の定義や概念を整理した。総括すると、それぞれの概念と定義は各研究によって異なり、統合されていない。さらに、「居場所」と「居心地」両方の概念を比較分析した研究はほとんど見当たらない。日本における、居場所と居心地の概念を整理して検討した先行研究としては、西川(2021)による『「居心地」と「居場所」の概念の検討』が唯一である(2021年11月時点)。

西川は、「居場所」は統一したイメージで使われておらず、さらに「居心地」については研究者によりなんとなく使われている現状があるとし、居場所と居心地を別の概念でとらえることの必要性を論じた。その上で西川は、「居場所」と「居心地」の差異について先行研究をレビュー

し、「居場所」と「居心地」は重なる部分もあるが違う側面も持ち合わせていると結論づけている。「居場所」は「被受容感」「他者との関係性」「思考・内省」「本来感」「役割感」「安心感」の6つが大きな構成要素となっており、「居心地」は「場所性」「身体性」「関係性」「時間性」「安心感」の5つが大きな構成要素である。

2つの概念の差異として、一つ目は、「居場所」は他者から認められたり、自分自身を客観的に見つめ直したりする時に感じるものであり、主観性だけでなく客観性をあわせ持つ側面がある。一方「居心地」は、居心地を感じている時には自分自身を客体化せず主体的に感じているものであるという点である。そしてもう一つの違いは「居心地」は「自己目的的」であり、「居心地」を感じることで自体が目的である。しかし「居場所」は自己完結的な側面だけではなく「他者依存的」な面も持ち合わせており、他者からの承認や役割感を得ることが目的となる場合もある（西川, 2021）ことが挙げられる。

また西川は、「居場所」という概念とは別に「居心地」という概念を明確にすることで、『「居場所」概念の物理的な場所と、人・自分自身との関係性による自己認識、そして「居場所」概念の現象・物との関係性や変則的な時間性、そして五感や情動・気分という中で身体が感じる身体性を包含することになる』としている。その上で、「居心地」と「居場所」が互いに補完し合い、「居心地」や「居場所」がより広く深い概念として相乗的な意味を創り出すのではないかと結論づけている。

目的

西川（2021）の概念整理は、「居場所」と「居心地」に関する概念の差異を検討するという点では先駆的であったが、あくまで先行研究のレビューに基づいて考察したものであり、定量的あるいは定性的なデータによって分析したものではない。そのため研究者自身の主観によって考察されたものである可能性は否定できない。

そこで本研究では、西川（2021）の概念整理を参考にしながら、定性的・定量的分析の両面から客観的に捉えた「居心地」の概念の構造を明らかにすること、また「居場所」と「居心地」の構成概念の差異を比較し、検討することを目的とする。

方法

(1) 対象者

関東の大学に所属する大学生 53 名（男性 13 名、女性 39 名、平均年齢 19.9、SD=1.23）であった。

(2) 調査期間

2021 年 10 月 8 日から 11 月 2 日にかけて実施した。

(3) 調査用紙

調査用紙は以下の 2 部構成であった。

①「居心地」と「居場所」に関する自由記述

「居心地」がよいと感じる場所や状況、および「居場所」だと感じる場所や状況について、それぞれ自由記述を求めた。さらに、「居心地」および「居場所」はどのようなことを表すかという点についても自由記述を求めた。

②居心地に関する質問項目

「大学生用適応尺度」（大久保・青柳, 2003）と「居場所」の心理的機能を測定する尺度」

(杉本・庄司, 2006) から、それぞれ一部を抜粋した計 30 項目から構成された。「大学生用 適応尺度」からは、第 1 因子の「居心地の良さの感覚」8 項目と第 4 因子の「拒絶間のなさ」 4 項目を用いた。「居場所」の心理的機能を測定する尺度」からは、第 2 因子の「精神的安 定」8 項目、第 3 因子の「行動の安定」5 項目、第 5 因子の「自己肯定感」5 項目を使用した。 それぞれの項目について、「非常にあてはまる」「ややあてはまる」「どちらともいえない」 「あまりあてはまらない」「全くあてはまらない」の 5 件法で回答を求めた。

(4) 手続き

調査対象者に Google フォームを用いて回答を依頼した。なお、倫理的配慮として、回答フォー ムの表紙に、回答は任意であることやいつでも回答を中止できること、回答しなくても不利益 は生じないことなどを明記した。なお、本調査は匿名で行われることから、通常の記名式の同 意文書の作成は不可能であるため、表紙の説明に対して同意するとの回答をもって調査の同意 表明とした。

結 果

居心地に関する質問項目の基本統計量

居心地尺度の全体および男女別平均値と標準偏差を算出し、性差を検討するため対応のない t 検定を行った。その結果、10 項目において有意差が認められ、いずれも女性の方が高得点で あった(表 1)。

表 1. 居心地に関する質問項目の全体および男女別平均値と標準偏差および性差の検定

	全体		男性		女性		t 検定	
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	t 値	性差
18安心する	4.75	0.48	4.46	0.66	4.84	0.37	-2.59*	男<女
⑮自分が場違いだと感じる	4.71	0.46	4.46	0.52	4.79	0.41	-2.31*	男<女
9幸せだ	4.69	0.55	4.46	0.66	4.76	0.49	-1.75	
8自由に話せる雰囲気である	4.67	0.62	4.46	0.97	4.74	0.45	-1.40	
⑫疎外されていると感じる	4.67	0.55	4.38	0.77	4.76	0.43	-2.21*	男<女
14満足する	4.61	0.57	4.54	0.66	4.63	0.54	-0.51	
13自由だ	4.57	0.58	4.38	0.65	4.63	0.54	-1.35	
12楽しい	4.55	0.70	4.62	0.51	4.53	0.76	0.39	
16ありのままの自分を出せている	4.55	0.50	4.38	0.51	4.61	0.50	-1.38	
24自分らしくいられる	4.53	0.64	4.31	0.63	4.61	0.64	-1.46	
28無理をしないでいられる	4.49	0.61	4.23	0.60	4.58	0.60	-1.81	
⑯孤立している	4.47	0.86	4.08	1.04	4.61	0.76	-1.97	
④浮いている	4.45	0.64	4.23	0.73	4.53	0.60	-1.45	
6素直になれる	4.45	0.70	4.31	0.95	4.50	0.60	-0.85	
2自分の好きなようにできる	4.43	0.67	3.85	0.69	4.63	0.54	-4.21***	男<女
23受け入れられていると感じる	4.43	0.83	4.00	0.71	4.58	0.83	-2.26*	男<女
1好きな物がある	4.41	0.61	4.15	0.38	4.50	0.65	-1.82	
26本当の自分でいられる	4.41	0.73	4.23	0.73	4.47	0.73	-1.04	
5自分だけの時間をもてる	4.39	0.72	4.08	0.76	4.50	0.69	-1.87	
22自分の好きなことができる	4.37	0.63	4.08	0.76	4.47	0.56	-2.01*	男<女
3周りから理解されている	4.33	0.82	3.69	1.03	4.55	0.60	-3.66***	男<女
20周囲に溶け込んでいる	4.27	0.75	4.00	0.82	4.37	0.71	-1.55	
30周りの人と楽しい時間を共有している	4.27	0.85	4.08	0.76	4.34	0.88	-0.97	
19何かに夢中になれる	4.10	0.94	4.23	0.83	4.05	0.99	0.58	
⑩他人から干渉されているように感じる	4.00	0.98	3.77	0.93	4.08	1.00	-0.98*	男<女
17自分ほうまくやれると感じる	4.00	0.92	3.92	0.64	4.03	1.00	-0.35	
29自分の能力を発揮できる	3.84	0.88	3.54	0.66	3.95	0.93	-1.46*	男<女
10自分の物がある	3.82	1.13	3.23	0.73	4.03	1.17	-2.29*	男<女
7自分に自信が持てる	3.80	0.94	3.62	0.65	3.87	1.02	-0.84	
25周りの人と類似している	3.06	0.99	3.00	0.91	3.08	1.02	-0.25	

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

○= 逆転項目

居心地に関する質問項目の因子構造と信頼性の検討

居心地に関する質問項目 30 項目について因子分析（主因子法・プロマックス回転）を行った。その結果、初期固有値の減衰と因子の解釈の可能性から 3 因子が抽出された（表 2）。

第 1 因子は「幸せだ」、「満足する」、「ありのままの自分を出せている」など 14 項目から構成された。幸福感や本来の自分自身でいられるという内容であることから「本来感」因子と命名した。第 2 因子は「周囲に溶け込んでいる」「周りから理解されている」など 8 項目から構成された。周囲との関係性の中で、自身が受容されているといった内容であることから「自己受容感」因子と命名した。第 3 因子は「安心する」「自分の好きなことができる」など 8 項目から構成された。個人の行動の自由が保障されることで、安心して過ごせるという内容であることから「安心感」因子と命名した。さらに、各因子に含まれる項目において、因子負荷量が高く、かつ因子の内容を適切に表している項目として、「本来感」因子 6 項目、「自己受容感」因子「安心感」因子ともに各 5 項目を採択した。また、採択された項目における各因子の信頼性を検討するため、クロンバックの α 係数を算出した。その結果、「本来感」因子は $\alpha = .82$ 、「自己受容感」因子は $\alpha = .82$ 、「安心感」因子は $\alpha = .75$ であり、各因子とも高い内的整合性が認められた。

表 2. 居心地に関する因子分析結果（主因子法，プロマックス回転）

	I	II	III
I. 本来感 ($\alpha = .82$)			
⑨幸せだ	.74	.13	.23
⑭満足する	.72	-.13	-.03
⑫楽しい	.71	.08	-.20
⑧自由に話せる雰囲気である	.64	.20	.00
19何かに夢中になれる	.52	-.09	-.17
24自分らしくいられる	.52	.37	.13
26本当の自分でいられる	.52	.41	.00
⑩ありのままの自分を出せている	.50	.12	.13
⑬自由だ	.48	-.20	.46
28無理をしないでいられる	.48	.27	.15
17自分はいまよくやれると感じる	.47	.15	-.13
6素直になれる	.40	.27	.04
1好きな物がある	.40	-.09	.03
29自分の能力を発揮できる	.37	.05	-.07
II. 自己受容感 ($\alpha = .82$)			
⑳周囲に溶け込んでいる	.96	.77	-.11
③周りから理解されている	.76	.76	.03
㉒孤立している（逆）	-.14	.64	.14
㉑周りの人と楽しい時間を共有している	.53	.58	-.25
㉔疎外されていると感じる（逆）	-.07	.58	.28
25周りの人と類似している	.06	.57	-.27
23受け入れられていると感じる	.10	.45	.07
7自分に自信が持てる	.29	.31	-.14
III. 安心感 ($\alpha = .75$)			
⑮安心する	.11	-.01	.74
㉒自分の好きなことができる	.37	-.00	.70
⑤自分だけの時間がもてる	-.31	.13	.62
②自分の好きなようにできる	.06	.15	.60
⑩自分の物がある	-.21	.49	.54
4浮いている（逆）	-.31	.28	.50
11他人から干渉されているように感じる	-.19	-.08	.50
15自分が場違いだと感じる（逆）	.07	.18	.47
因子間相関			
I		.26	.29
II			.11

○は採択項目、 α は採択項目による数値

(逆)=逆転項目

居心地および居場所に関する自由記述の検討

(1) 「居心地がいい」および「居場所」と感じる場面の分類

「居心地がいい」および「居場所」と感じる場面の自由記述を KJ 法で分類した。1 人の対象者が複数の回答を挙げている場合には、それぞれ 1 件数として分析した。その結果、回答者が「居心地がいい」と感じている場面は「場所・空間」、「親しい間柄の他者」、「場面」、「行動」、「趣味」、「1 人有的时候」、「その他」の 7 種類に大きく分類された。同様に「居場所」は「場所・空間」、「親しい間柄の他者」、「場面」、「1 人有的时候」、「その他」の 5 種類に大きく分類された（表 3-1）。

(2) 「居心地」および「居場所」のイメージの分類

「居心地」および「居場所」のイメージについても、(1) 同様に分類を行った。その結果、「居心地」イメージは「安心感」、「感情」、「疎外感・自身への危害の有無」、「受容感・被受容感」、「その他」の 5 種類に大きく分類された。「居場所」は「受容感・被受容感」、「安心感」、「役割感」、「1 人有的时候」、「特定の場所」、「その他」の 6 種類に大きく分類された（表 3-2）。

表 3-1. 「居心地がいい」および「居場所」と感じる場面

「居心地がいい」と感じる場面		
大分類	中分類	内容
「場所・空間」(59 件 - 46%)	<家> (40 件)	<家の場所> 自宅、祖母の家、ベッド、トイレ <家での行動> 寝転ぶ
	<公的な場所・空間> (11 件)	<にぎやかな空間> 学校の教室、人がいる空間、東京ディズニーリゾート <静かな空間> カフェ、電車の席、図書館
	<抽象的な場所・空間> (6 件)	心を許せる人しかいない場所、ミスが許される空間、緊張しない場所や空間
「親しい間柄の他者」(36 件 - 28%)	<家族> (9 件)	家族や親戚
	<友人・恋人> (27 件)	友人、恋人、気の許せる人といるとき
「場面」(11 件 - 9%)	<承認> (9 件)	疎外感を感じない、自分が認められている、ありのままの自分でいられる、幸せな場面
	<高自由度> (2 件)	逃げることができる、だれにも干渉されない
「行動」(8 件 - 6%)		散歩、出かける、ひなたぼっこ、食事をしている、寝るとき、部活動
「趣味」(6 件 - 5%)		自分の趣味に没頭、楽器を演奏、バスケ、おやつにコーヒー
「1 人有的时候」(5 件 - 4%)		1 人有的时候
「その他」(3 件 - 2%)		適切な気温
「居場所」と感じる場面		
大分類	中分類	内容
「場所・空間」(44 件 - 47%)	<家> (34 件)	家、自分の部屋、祖父母の家
	<公的な空間> (6 件)	学校、教室、塾、研究室
	<抽象的な空間> (4 件)	楽しいと思う場所、通い慣れている場所
「親しい間柄の他者」(23 件 - 24%)	<家族> (11 件)	家族といるとき、家族と話しているとき
「場面」(16 件 - 17%)	<友人> (12 件)	友達といるとき、仲の良い人がいる場所
	<承認> (13 件)	自分が受け入れられている場所、非難されない場所、周りが自分を認めている、自分も相手も気を許している状況、自分が素で話せるとき
	<その他> (3 件)	自分の場所がある、常に感じる、雑談している
「1 人有的时候」(2 件 - 2%)		1 人有的时候、プライベートな空間
「その他」(9 件 - 10%)		バイト先、サークル・部活

表3-2. 「居心地」および「居場所」のイメージ

「居心地」のイメージ		
大分類	中分類	内容
「安心感」(53件 - 60%)	<安心できる> (33件)	安心感、心が安らぐ、落ち着く、緊張しない、信頼できるか
	<気をつかわない> (20件)	沈黙が苦しくない、波長が合う、楽にいられること、なんにも気にしないで良い、人に気をつかわない、気兼ねなく過ごせること
「感情」(18件 - 20%)	<具体的> (9件)	楽しい、過ごしやすさ、そこに居たいという気持ち、幸福、快適か
	<抽象的> (9件)	その場の雰囲気、自分が感じること、気持ちいいなにかがあるか
「疎外感・自身への危害の有無」(7件 - 8%)		自分に危害が及ぶかどうか、ストレスがたまらない、体が不調にならない、気を張らずにいられるか
「受容感・被受容感」(5件 - 8%)		嫌なことを許せる、自分はいても良いか
「その他」(6件 - 6%)		匂い、自分がそこにあること、睡眠が取れる、人と関わる時、1人の時、解放感
「居場所」のイメージ		
大分類	中分類	内容
「受容感・被受容感」(計35件 - 47%)		自分がいっても良い場所、自分を受け入れてくれる、心の拠り所、存在意義を感じる、周りが自分を認めてくれる場所、その場において苦痛でない、寂しいと感じない
「安心感」(20件 - 27%)	<場所> (17件)	安心できる、心が落ち着く、楽にいられる場所、ありのままの自分でいられる場所、当たり前場所、好きなところに戻って来れる場所
	<その他> (3件)	味方、自由に動ける、楽しい
「役割感」(7件 - 9%)		自分があるべき場所、自分がないと空席ができると感じる、そこに所属している、自分がある場所
「1人であること」(3件 - 4%)		1人になれる場所、1人で気兼ねなくいられる
「特定の場所」(3件 - 4%)		懐かしい場所、何度も訪れたくなくなったり居続けたくなくなる、周りが自分を好きでいてくれる場所
「その他」(7件 - 9%)		居心地の良い場所、気遣いができる空間、自ら気を遣いたいと思える空間、家、家族

考 察

「居心地」の構成概念

因子分析の結果から、「居心地」は「本来感」「自己受容感」及び「安心感」という3つの因子から構成されることが示された。また、自由記述においては、「場所・空間」「行動」「1人であるとき」がそれ以外の新たな構成要素として分類された。「場所・空間」では、カフェや図書館などの回答が見られることから、「居心地」の概念における自己完結型の側面が明らかになった。森山・入山(2008)は公園を例に挙げ、「人は自由に行動しながらも他者の存在を意識し、互いにかかわることがない関係に居心地のよさを感じる」と説明している。本研究において具体的な場所や空間として挙げられた内容も、これと同様の機能を持つと推測される。さらに「1人であるとき」という要素も抽出されたことから、「居心地」は必ずしも直接的な他者との関係性を必要としてはいないと考えられる。一方、多くの人は他者との相互作用を通じた居心地のよさを感じていることも示された。西川(2020)は、「居心地」について「人間関係も場の要因の一つに過ぎず、もっとマクロな視点から「場」というものを意識して、安心できる場、良い方向に循環している場を作り上げることが居心地をよくすることに大きく寄与していく」と述べている。本

研究の結果からも、「居心地」における人間関係は1つの要因ではあるものの、他者の存在も重要であることが示唆できる。以上の結果から、「居心地」は、他者の存在を必須とはしないが、他者の存在を意識したり、他者からの被受容感を得て安心感を得られる場所や空間と定義づけられる。

「居場所」の構成概念

自由記述において、「居場所」を感じる場面や状況は「場所・空間」「親しい間柄の他者」「場面」「1人有的时候」であり、「居場所」のイメージでは「受容感・被受容感」「安心感」「役割感」「1人であること」「特定の場所」と分類された。青年版心理的居場所感尺度（則定,2008）は「本来感」「役割感」「被受容感」「安心感」の4因子から構成されており、久田（2000）や住田（2008）の「居場所」の定義も同義の結果を示していることから、本研究はこれらの先行研究を支持したと言える。さらに、本研究では「居場所」の定義でよく使われる「ありのままの自己」をより具体化した項目内容を抽出することができたと考えられる。ここで、「1人有的时候（こと）」が抽出されたことは、「ありのままの自己」でいられる空間を1人有的时候も感じ、そこに「居場所」を感じるという人が少なからず存在することを意味しており、先行研究では見られなかった新たな要素を抽出できたと言える。以上のことから「居場所」は、ありのままの自己を安心して表出し、自身の役割や被受容感を感じる場所や空間と定義づけられる。

「居心地」と「居場所」両概念の差異

本研究において、両概念ともその場や他者との関係性において「被受容感」や「安心感」を抱き、「場所・空間」をイメージするという共通項が導き出された。このことは、西川（2021）も「居場所」と「居心地」の構成要素を比較すると、「安心感」「場所性」「他者との関係性」は共通するとしていることから、先行研究のレビューから考察した西川の主張を、定性的・定量的な分析からも支持する結果となった。西川は「身体性」「時間性」「事物・物との関係性」は「居心地」の構成概念には含有されるが「居場所」には含まれないとしているが、本研究ではその差については明らかにされなかった。また、多くの居場所論は他者の存在を仮定して論じているが、「居心地」の構成概念と同様に「1人有的时候（こと）」でも「居場所」を感じる人が少なからず存在することも明らかとなった。以上の結果から、本研究においては「居心地」と「居場所」の構成概念において大きな差は認められなかった。しかし、「場所性」という観点で、自由記述の構成要素を検討すると「居心地」には公的な空間が挙げられているが、「居場所」はごくわずかしが挙げられていない。加えて、「居心地」では他者との相互作用を必須としていないことから、「居心地」という概念の方がより包括的で広い概念であり、「居心地」のよい場所や空間が「居場所」の大前提であるとも言えよう。以上の結果から両概念において「被受容感」「安心感」「場所性」は共通しているが、「居心地」では他者の存在を必須条件としておらず、「居場所」を感じる大前提としての包括的な概念であることが明らかになった。

今後の課題

本研究において、対象者が1大学の学生のみであり、対象者の人数が限られていることが反省点として挙げられる。より多くの対象者に協力を依頼することに加え、世代差についての検討も

概念の一般化のためには必要である。また、「居心地」や「居場所」それぞれの概念は、物事の捉え方や考え方に大きく影響されることから、パーソナリティとの関係性も検討課題の1つである。これらの課題があるものの、両概念を定量的・定性的なデータを用いた研究は現時点で見られないため、本研究は「居心地」・「居場所」研究において意味あるものとして位置づけられると言える。

引用文献

- 萩原健二郎 (2001). 子ども・若者の居場所の条件, 田中治彦編著, 子ども・若者の居場所構想—「教育」から「関わり」の場へ, 学陽書房, 63.
- 久田邦明 (2000). 『子どもと若者の居場所』萌文社, 93.
- 廣木克行 (2005). 臨床恐怖: 子どもの居場所をつくる, 大阪教育出版, 106-107.
- 石川美智子 (2021). 学級居心地尺度の開発と、友達関係とのモデルの検討, 常葉大学教育学部紀要, 41, 41-48.
- 中島喜代子・廣出円・小長井明美 (2007). 「居場所」の概念検討, 三重大学教育学部研究紀要, 58, 77-97.
- 中原睦美 (2002). 受診が著しく遅延した重症局所進行乳癌患者の心理社会的背景の検討: 依存のあり方と居場所感をめぐって, 心理臨床学研究, 20, 52-63.
- 西川絹恵 (2021). 「居心地」と「居場所」の概念の検討, 中京経営紀要, 17, 1-11.
- 西川絹恵 (2020). 働く「場」の居心地に影響を与える要因—インターネット調査を用いた定量調査による検討—, 中京企業研究, 42, 143-180.
- 西川絹恵 (2019). 自己組織化を促す「場」について—供給者や消費者の居心地の良い場を作り出す, 中京企業研究, 41, 中京大学記号研究所, 89-102.
- 則定百合子 (2008). 青年期における心理的居場所感の構造と機能に関する研究, カウンセリング研究, 41, 64-72.
- 森山裕理・入山敦司 (2008). 公園のランドスケープデザインが居心地と行動に与える影響, 日本建築学会東北支部研究報告, 計画系 71, 221-224.
- 文部省 (1992). 登校拒否 (不登校) 問題について—児童生徒の「心の居場所」づくりを目指して—学校不適応対策調査研究協力者会議報告, 教育委員会会報, 44, 25-29.
- 大久保智生・青柳肇 (2003). 大学生用適応感尺度の作成の試み—個人—環境の適合性の視点から, パーソナリティ研究, 12 (1), 38-39.
- 岡本千春・岡田みゆき (2020). 夜型子育てサロンの実態, 北海道教育大学紀要, 71 (1), 273-279.
- 菅野鈴・木村健一 (2019). 居心地の良い公共空間を構成する要素に関する研究, 日本デザイン学会研究発表大会概要集, 66 (0), 日本デザイン学会, 378.
- 杉本希映・庄司一子 (2006). 「居場所」の心理的機能の構造とその発達の变化, 教育心理学研究, 54, 289-299.
- 住田正樹 (2008). データから見る子どもの居場所, 深谷和子編, 児童心理特集子どもの居場所づくり, 金子書房, 35-39.
- 生徒指導・進路指導研究センター (2012). 生徒指導リーフ「絆づくり」と「居場所づくり」, 文部科学省国立教育政策研究所, 2, 1-4.
- 吉村聖治 (2000). 青年たちの「居場所」と「自分探し」—橋渡しとなる世代間交流を, 久田邦明編, 子どもと若者の居場所, 萌文社, 181-200.